

# 大友時代を 生きた人々



鹿毛 敏夫

アレッサンドロ・ヴァリニャーノは、カトリックの司祭で、イエズス会東インド管区の巡察師として16世紀末の日本を訪れたイタリア人です。

1539年、イタリアのナポリ王国の貴族の家に生まれ、ローマ教皇のパウルス4世(在位1555～59年)とピウス4世(同59～65年)の下で才能を發揮して、70年に司祭に叙階されます。そして73年、アジア地域での宣教活動を巡察する東インド管区巡察師に抜てきされ、翌年にポルトガルのリスボンを出発、インドのゴアとマレーシアのマラッカを拠点とした視察活動を行いました。

東インド管区東端の日本には、79年から82年にかけて滞在。日本各地を訪れ、大友義鎮(宗

麟)、織田信長、高山右近にも面会しています。

ヴァリニャーノは、日本人司祭育成のための教育機関の充実に必要と考え、肥前有馬(長崎県南島原市)と近江安土(滋賀県近江八幡市)にセミナリオ、豊後府内(大分市)にコレジオ、豊後臼杵(臼杵市)にノビシヤドを開設。これらは日本人司祭・修道士育成のための初等教育、高等教育、および修道会員の養成を担いました。

さらに、ヴァリニャーノの最大の功績は、天正遣欧少年使節を企画、実行したこと。その目的は、ローマ教皇とスペイン、ポルトガルの両国王に日本宣教の成果をアピールして経済的援助を得ること、日本人にヨーロッパのキリスト教世界を

見聞させて帰国後にその偉大さを伝え広めさせること。そのため、使節に選んだのは伊東マンシヨ(主席正使)、千々石ミゲル(正使)、中浦ジュリアンと原マルチノ(ともに副使)という、有馬セミナリオで学ぶ13、14歳の少年でした。彼らは、九州の大名大友義鎮、大村純忠、有馬晴信の名代として82年に出發してローマへ渡り、90年に帰国しました。

少年たちは、日本の3大名からの書状と贈り物を携えて渡欧しましたが、そのうちイエズス会総長宛て大友義鎮書状は、花押が10年以上前のもの、かつ洗礼名フランシスコの漢字署名が通常と異なることから、義鎮自作ではないと推測されています。ヴァリニャーノの画策を読み取ると、彼にとっては大村、有馬のネームバリューでは物足りず、書状を偽作してでもポルトガル国王との外交関係を締結している「Rey de Bungo」(豊後国王)からの派遣という形式を調べ、その

国王大友義鎮の名代として主席正使伊東マンシヨの派遣を演出する必要があったといえます。(名古屋学院大学国際文化学部長・教授)

11月1回掲載

ヴァリニャーノが偽作したと推測されるイエズス会総長宛て大友義鎮書状(イエズス会文書館蔵)

## アレッサンドロ・ヴァリニャーノ 天正遣欧少年使節を企画・実行

